

# 位田将司著 『「感覚」と「存在」』

横光利一をめぐる「根拠」への問い

山崎義光

本書は、横光利一の文学理論と同時代の哲学的言説との連関を明らかにすることを骨子とする。それを光源として横光の主要な小説テクストを解釈し、一九二〇～四〇年代という歴史性のなかに定位している。丹念な検証に基づきながら、スリリングで斬新な解釈を示した横光研究である。

序章で、「震災」に対する横光の発言をとりあげ、そこに横光が思想的に格闘しようとした問題の所在を読んでいる。体験の水準における「震災」は、文学理論の水準に影響を及ぼしたとみる。震災体験と、認識、存在の「根拠 ground」をめぐる問いとの通底性である。この問いを追究すること、すなわち新カント派の認識論を経由して、「虚無」(秩序崩壊状態のカオス)のうちに頭わになる「存在」論的な問いへと転回する横光の理論、小説実践の軌跡を追究することが本書の論脈である。

本書の構成にしたがって言えばこうなる。「新感覚論」(一九二五)から「形式主義」論争(一九二八)へと持続する論理的な筋道を、一九二〇～三〇年代における新カント派哲学を参照することで、「感性」と「悟性」の交渉作用による総合・共存という論理を核心として展開していたことを跡づける(第一章)。そこから、初期の

小説「日輪」を読み解く(第二章)。そして、新カント派の論理とマルクス「資本論」の価値形態論との近接をふまえることで、プロレタリア文学派と表向きは対抗しながらも、その実、価値形態論と通底する唯物論的「形式主義」を徹底したテクストとして小説「上海」「機械」を解釈している(第三～五章)。

そこから、「純粹小説論」(一九三五)に至る過程で認識論から存在論への転回があることを論じる。この転回は、三木清における新カント派的認識論からハイデガールの存在論への転回と平行関係にある。西田幾多郎、田辺元をはじめ京都学派の歴史哲学、近代の超克論との近接から「純粹小説論」における「自意識」と「四人称」を読み解く(第六～八章)。そのうえで、「歐洲紀行」と「旅愁」を表裏の関係に位置づけ、自意識の問題をどのように形象化したかを論じている。日記体としての「歐洲紀行」は、自意識の「穴」(亀裂)を顕わにしている。それに対して、「旅愁」の要所に現れる「俳句」「ノートルダムの大寺院」「櫻」などの形象を、自意識の鏡(媒介)としての表象、すなわち「立っている」もの(=表象 vorstellung)であるとみる解釈から、「旅愁」を、自意識の亀裂を回復しようとする欠如と剰余の弁証法的な論理で構成されたテクストであると論じる(第九～十章)。そして、戦前から戦後へとまたがる時間を物語内容とする「微笑」は、排中律、視線と視線の差異(視差)のモチーフを、新感覚派以来の二項対立の分裂と一瞬の総合(微笑)を形象化したテクストとして解釈する(第十一章)。こうして初期から晩年にいたる横光の文学的営為は、一貫した認識論、存在論的な問いをめぐるものだったことが論じられる。

本書の功績は、従来の横光に対する理解枠組み、すなわち新感覚派/新心理主義/日本回帰という変化として了解されてきた枠組み

に対し、理論的な持続と転回があったことを跡づけた点にある。また、それと関連づけて「日輪」「上海」「機械」「旅愁」「微笑」といった主要な小説テクストに新たな解釈を加えたことにある。

ただ、私は、そうした本研究の方法論的選択による視野からは洩れ、はみ出る過剰部分の方に興味を惹かれた。

新カント派的「神話」論と「日輪」の関係論を論じた第二章をとりあげてみよう。「日輪」をとりあげる理由は次の観点からだという。

まず、「日輪」は「映画劇」「劇」と評され、小説とは異なるジャンルの「形式」をもつ。そして、生田長江訳、フローベール「サランボオ」の翻訳文体に影響を受けた。この翻訳は、文体において特定の時代や階級を連想させない「普遍的なる日本語」であることが意識されていた。また、物語内容も「神話」をモチーフとする。「日輪」も、文体、物語内容において「普遍的」な「形式」へ変換するメカニズムを内在させていると論じる。一方、横光がカント的な用語をもちいたこと、由良哲次との交流や同時代の新カント派認識論の広範な影響を傍証とするなど、直接間接(意識的無意識的)に、横光の文学理論形成、小説実践に影響があったことを跡づける。こうして、「日輪」を、新カント派とそれを受容した三木清の「構想力の論理」におけるロゴスとパトスの弁証法的な「形式」の論理を萌芽的に具現化したテクストとして読解する。

しかしながら、新カント派の「象徴形式」「神話」論にせよ、それを受けた三木の「神話」論にせよ、それらは一般的普遍的問題として論じられたものである。したがって、「日輪」にのみあてはまるものではない。それらを大きくはみ出した普遍妥当的な概念として提示されている。たとえば、横光と対比的に述べられている「自然主義」「私小説」のような特定個人の身辺雑記的題材であっても、

そのテクストが個別性を超えた一般性を提示していれば、それは現代の「神話」たりうる。あらゆる「小説」はここでいう「神話」性を帯びうる。「神話は単に人類発達の原始的な段階に属するものでなく、寧ろあらゆる社会においてつねに存在するものでなければならぬ」(三木清「構想力の論理」)。そうであれば、論ずべきは、「日輪」は、どのような現代の「神話」を生成していたのかということではなかったか。そこが洩れているのが気になった。

たとえば、「日輪」ではなく、同時に発表された「蠅」を取り上げてもよかつたはずである。「空虚な場庭」からはじまるこの小説は、物語世界外の〈それ〉が〈与える〉ようにして語られ、誰・どことも指定しえないカメラ・アイの視座から描出される。馬車は、馬と客車を結びつけた技術的道具として作られ、ここからあらへ人・物を結びつける人工的な交通システムである。それに乗り込む人々は、それぞれに主體的な目的をもって乗り込むが、このシステムに従属している。特定の主体の動機や心理や行動に還元して了解し得ない、システム化された「場」の構造を露呈させて描かれる点で、近代都市的な世界のありようを「形式」化している、と。

本研究で「蠅」ではなく「日輪」をとりあげた意義は何だったか。一九二〇～三〇年代における「日輪」の「神話」性とは？ 本書の構成からみると、その当否は措くとして、「無の場所」に「国家」という場所を「与える」「四人称」を論じた後章との関連で、「国家」創生を題材としながら、空虚な「形式」を露呈させたテクストとしての「日輪」に、その萌芽をみたということでもあっただろうか。

(二〇一四年四月一〇日 明治書院刊 三三〇頁 六〇〇〇円)

# 日本文学

# 1

2015年 VOL. 64  
日本文学協会編集・刊行

特集・教科書と文学 II

## 日本文学協会

### 第35回研究発表大会

#### 研究発表者の公募について

日本文学協会では、統一テーマによる年度大会とは別に、研究発表大会を開催しています。今年度の日程および会場が下記のとおり決定しましたので、発表者を広く公募します。

研究発表大会は、古代・中世・近世・近代・国語教育の五部門にわかれ、部門ごとの発表が隣接する五つの会場で同時進行します。より多くの会員が、それぞれの専攻分野に応じた新しい課題を追求し、議論を深めてゆくことを目指すものです。また、五会場が隣接しているため、参加者は五つの部門を自由に行き来して、専攻領域以外の発表を聴き、議論に参加することもできます。したがって発表者が、自分の専攻領域を超えた問題提起をすることも可能です。

会員の日頃の研究成果の発表の場として、また様々な領域の意見が交流する場として、多くの方にこの研究発表大会を活用していただくことを期待します。

研究発表を希望される方は、氏名および所属(学校名など)、ご希望の部門、メールアドレスを明記し、発表題目と要旨(400字)を添えて、4月15日までに事務局まで郵送にてお申し込みください。また、日本文学協会ホームページからお申し込みができます。申し込まれた方には、4月末日までにご連絡いたします(申し込み者が多数になった場合、調整させていただきます)。

記

日時 7月5日(日)

会場 奈良女子大学

一九五三年二月二十八日 第三種特別郵便物許可  
二〇一五年一月一〇日 発行毎月一回一〇日発行第六四巻第一号

日本文学 第六四巻 第一号

定価九七七円  
本体九〇五円

編集者 山田俊治  
印刷所 東京印刷株式会社  
発行所 東京都荒川区西日暮里五丁目一丁目一三番地  
〒130-0005 東京都豊島区南大塚一丁目一〇番地  
電話 〇三三九四二二七四  
三美印刷株式会社  
〒112-0001 東京都文京区千石二丁目一丁目一三番地

#### 特集・教科書と文学 II

教科書を超える〈ヤマトタケル〉…… 稲生知子 2

～女性の視点から～

定番教材(学習材)を繋ぐ古典教育(学習)…… 有馬義貴 13

～平安時代の文学作品を例として～

国語教育における「古典」…… 志立正知 22

教室で小説を読むために…… 角谷有 32

～定番教材「舞姫」を読み深める～

戦争文学教材で考える戦争のリアリティ…… 須藤敬 45

～「大人になれなかつた弟たちに」の描くB29を入り口に～

教科書と文学…… 山本眞一郎 57

子午線 フィリピンにおける日本古典芸能…… 福田安典 68

読む おにたの絶望の向こう側へ…… 杵田恵子 70

～超越した〈語り〉から読めること～

書評

斎藤英喜著『異貌の古事記』…… 山下久夫 76

～あたらしい神話が生まれるとき～

一柳廣孝著『無意識という物語——近代日本と「心」の行方』…… 安藤公美 78

竹内瑞穂著『変態』という文化——近代日本の〈小さな革命〉…… 生方智子 80

位田将司著『感覚』と『存在』…… 山崎義光 82

横光利一をめぐる「根拠」への問い

村上呂里・萩野敦子編『沖繩から考える』…… 渡辺春美 84

『伝統的な言語文化』の学び論

今月号掲載の論文要旨

1・2月号会案内

新刊紹介

31・66・67・74

75

88

84

82

80

78

76

70

68

57

45

32

22

13

2